



## 消(け)残りの 雪にあへ照る あしひきの 山橋を つとに摘み来(こ)な

万葉集 巻20-4471 大伴家持

幸い消えずに残っている白い雪に映えて、ひとしお赤々と照る山橋、その実を土産にするため、採りに行こう。

### 町制施行70周年記念式典が開催されました！

月日の経つのが本当に早いもので、今年も師走を迎え、慌ただしい日々を送っておられることと思います。周りを見渡せば、紅葉が目に見え、鮮やかだった錦秋の時期も終わりを告げ、木枯らしに落ち葉が舞う季節へと移り変わり、朝の冷え込みで霜が降りる頃となりました。

学校・園では、2学期の終業式となる23日まで2学期における学習や保育のまとめとともに、期末懇談などが行われています。特に中学校3年生は、期末テストの結果を受けての進路決定に向けた大事な三者懇談が行われ、本人が志望する私立や公立の高校等について話し合われます。これから、目標に向かって受験までの一日一日を大切に過ごしてほしいと思います。

ところで、先月の11月30日(日)に広陵町町制施行70周年の記念式典がかぐや姫ホールで開催されました。広陵町は、この式典をはじめとして、今年度、「ともに、広陵。もっと、広陵。」をキャッチフレーズに、これまでも、町政説明会、ラジオ体操会、かぐや姫まつり、文化祭、スポーツフェスティバルなど、70周年を冠したイベントを行ってきました。

午前10時から始まったオープニングイベントには、今年で結成31年目を迎えた金明太鼓の皆さんに、「打てや はやさん」の軽快かつリズムカルな演奏をしていただき、華やかにその幕が開けました。



次に参加者全員による国歌斉唱と3つのコーラス団体、かぐや姫・ティンカーベル・はなみずきの町歌斉唱がありました。町歌は、「なにわのモーツァルト」と言われたキダ・タローさんの作曲により昭和52年12月より歌い継がれています。

その後、広陵町の70年のあゆみを15分のVTRにまとめた映像が流され、昔の懐かしい風景や建物とともに伸びゆく町のパワーが感じられました。

記念式典の開会式では、吉村町長の式辞、谷議長のおあいさつ、そして、奈良県知事をはじめ、3人の方々の来賓祝辞がありました。また、その後、サプライズとして、高市総理大臣からの町制施行70周年をお祝いするビデオメッセージがありました。



開会式第1部の最後には、特別表彰として、山村前町長と松井前副町長に対する感謝状の贈呈が行われました。私にとって、お二人は、私の子どもたちへの教育に対する想いをしっかりと受け留めていただくとともに、様々な取組を支援していただき、改めて心の中で感謝の想い伝えさせていただきました。

続いて、第2部は歌唱発表と記念講演でした。その2部のスタートを飾っていただいたのは、ソプラノ歌手の有田輝子さんと広陵中学校コーラス部、真美ヶ丘中学校芸術部による「広陵町イメージキャラクター かぐやちゃんの歌」と「広陵町イメージソング『広き陵』」の発表でした。「かぐやちゃんの歌」は有田さん自ら作詞作曲された歌で、有田さんがかなり前から、ゆるキャラである「かぐやちゃん」の追っかけをされていたのと、広陵町にも度々足を運んでいただき、地域のイベントにも参加され、町に関心をもっていただいたことがきっかけで作っていただきました。

「広き陵」は、町制施行60周年の際に、広陵町のイメージソングとして歌詞を公募し、最優秀賞に大山真人さんの作品が選ばれ、その詞に当時、広陵中学校の教頭先生だった米谷幸さんに曲をつけていただいた歌です。

有田さんと子どもたちの歌のコラボはとてもすばらしく、「かぐやちゃんの歌」に採り上げられたかぐやちゃんと広陵町の名所や特産品である、イチゴ、ナス、靴下がイメージされました。また、「広き陵」は穏やかなバラード風の歌で、広陵町の風景と明るい未来が想像でき、とても爽やかで清らかな印象を受けました。そして、最後には有田さんのソロ演奏で、歴史ある広陵町のすばらしい風景を皆さんと思い描いてほしいと「ふるさと」を感情を込めて歌っていただきました。



第2部の最後には、オリンピックの柔道競技で3連覇を果たされた名誉町民でもある野村忠宏選手の記念講演がありました。野村選手は、アトランタオリンピック(1996年)、シドニーオリンピック(2000年)、アテネオリンピック(2004年)の3大会で柔道史上初、全競技を通じてアジア人初となるオリンピック3連覇を達成されました。40歳で現役を引退後、現在は国内外での柔道競技の普及活動のかたわら、テレビでのキャスターやコメンテーターとして活躍されています。

はじめに、野村選手の紹介ビデオが映され、華々しく活躍されたオリンピック3大会の様子や自身が膝等の怪我を負いながらも現役選手にこだわり、もがき続けた場面、そして40歳での引退の様子が映し出されていました。その後、野村選手の講演では、「子どもの頃、柔道、水泳、サッカー、野球に取り組んだ中で、おじいさんに教えてもらった柔道が一番好きになれたし、一番真剣に夢中になれた。」と話されていました。「中学校、高校でも好きな柔道を続けたが、決して日本のトップにもなれず、大学4年生の時に初めて、全日本選抜柔道体重別選手権で優勝し、オリンピック代表選手に選ばれた。自分が変わったのは恩師の言葉と支えであった。」と。その後は、オリンピック代表選手としてプレッシャーに押しつぶされそうになる中、「目標を定め、攻撃し続けること、そして自分を信じ続けることと努力すれば必ず夢は叶うということを常に思い続けたことが結果につながった。」と熱い想いを語っていただきました。子どもたちにも是非、聴かせたいすばらしい講演内容でした。





## 教育委員会の取組

### 第4回スポーツフェスティバルを開催！

第4回広陵町スポーツフェスティバルが、11月16日(日)に中央体育館、格技場、広陵中学校グラウンド・体育館にて開催されました。当日の朝は、少し冷え込んだ様子でしたが、時間の経過とともに気温も徐々に高くなり、身体を動かすには快適なスポーツ日和となりました。

8時30分から中央体育館で開始式を行うとともに、9時から中央体育館(ラダーゲッター、リズムジャンプ、ボッチャ、バスケットボールフリースロー)、格技場(モルック、ビーンボウリング)、広陵中学校グラウンド(体力測定、靴とばし、キックターゲット、ディスクゴルフ、ストラックアウト)・体育館(VRスポーツ、スポーツ吹き矢)で13種目の競技を開始しました。

参加された方々により楽しく身体を動かしてもらおうと新たな種目として、ボッチャ(パラリンピックの正式種目でカーリングによく似たボールゲーム)、ラダーゲッター(ヒモでつながっている2個のボールをラダー「ハシゴ」に向かって投げ、ボールがラダーに引っ掛かると得点となるゲーム)、ディスクゴルフ(ゴルフコースを模した小型のコースで、フライングディスクを専用ゴールにいかに少ない投数で入れられるかを競うゲーム)、VRスポーツ(仮想現実「Virtual Reality」を活用したスポーツ、今回はバドミントン、バスケットボール、野球のバッティング)、スポーツ吹き矢(腹式呼吸法を積極的に用いる健康法と日本古来の吹き矢「吹矢」を融合させ、定められたルールでのスポーツ性を持たせた競技)を導入しました。

フェスティバルの運営面では、昨年もお世話になったボランティアスタッフとして、スポーツ協会の役員・支部長・副支部長、スポーツ推進委員、教育委員会職員をはじめ、県ニュースポーツ協会、青丹学園、大和広陵高校・奈良文化高校の生徒さんなど多くの方々にフェスティバルに携わっていただきました。

この日は、絶好のスポーツ日和だったこともあり、午前10時ごろから子ども連れのご家族をはじめ、老若男女すべての年代の方々が元気いっぱいそれぞれのスポーツを思いっきり楽しんでいました。また、競技を行う上で励みとなる、受付時に手渡されたスタンプラリー受付用紙を持って、一つ一つの競技を終えるごとにスタンプを押してもらい、賞品の獲得にも精を出しておられました。私も体力測定をはじめ、新たな種目を中心に11種目の競技を体験し、快い汗を流すことができました。今年で4回目となる今回のスポーツフェスティバルは、参加者もこれまでで最も多く、657名に参加していただきました。今後、もっと多くの方々が参加してもらえるよう魅力ある取組にしたいと思います。



ディスクゴルフ



スポーツ吹き矢

## 虐待防止推進月間で

### 「52ヘルツのクジラたち」を上映しました！

先月の11月は「虐待防止推進月間」でした。各地の児童相談所における児童虐待に関する相談対応件数が年々増加し、子どもたちの尊い命が虐待によって奪われる中、国は平成16年から毎年11月を「児童虐待防止推進月間」と位置づけ、児童虐待防止のための集中的な広報・啓発活動を行い、社会的関心の喚起を図っています。また、こども庁でも、児童虐待問題に対する社会的関心を喚起するため、児童虐待防止法が施行された11月に「オレンジリボン・児童虐待防止推進キャンペーン」を実施し、集中的な広報啓発活動を行っています。



本町では、児童虐待防止の取組として、以前からさわやかホールロビーと図書館ロビーに幼稚園・こども園の園児に作ってもらったオレンジリボンツリーを飾っています。また、毎年講演会等も行ってきました。

今年は、講師を招聘しての講演会ではなく、11月6日(木)にかぐや姫ホールで、「52ヘルツのクジラたち」の映画を上映しました。この映画は、原作が町田そのこさんの2021年本屋大賞受賞作品で、このタイトルは、他の鯨からは聞き取れない高い周波数で鳴き、懸命に歌っても仲間が気付かれないため「世界でもっとも孤独なクジラ」といわれている52ヘルツの鯨から取られているようで、孤独を抱える人々の心の声に焦点が当てられています。主人公の三島貴瑚は、母親からの虐待を受けて育ち、義父の介護を押し付けられた21歳の女性です。彼女は、祖母が住んでいた大分の海沿いの町に移住し、そこで「ムシ」と呼ばれる13歳の少年と出会います。この少年もまた、虐待を受けていて、二人は互いに支え合いながら成長していく物語です。ただこの映画は、虐待だけに焦点を当てているのではなく、介護、トランスジェンダーなどの社会問題をも扱い、声を上げられない人々の「声なき声」に光を当てています。特に、孤独や愛を求める心情が深く描かれています。



私は、見たい映画が封切りされるとき、必ず原作を読んでから見るようにしています。それは、主人公など自分が思い描くイメージと映画監督が決めた配役とのギャップを楽しみたいからです。今回もこの映画の原作を読みましたが、登場人物の数人カットされた部分やわずかにイメージと違う部分もありました。しかし、ラストシーンでは、感動のあまり涙を流してしまいました。

研修会の最後に、私から参加された皆さんにお礼のあいさつをさせていただきました。まずはこの映画の根底を流れる作者の想いと感想を述べるとともに、虐待やヤングケアラーなど様々な事情で心に傷を抱える子どもたちのそれぞれの声なきSOSに気付ける存在になってほしい。そして、そんな場面に遭遇したら、いち早く「189番」に電話してくださいとお願いしました。